

追憶馬淵 ▶ 我與馬淵父子 私と馬淵父子

나와 마부찌 부자(父子)

Mabuchi Toichi and Mabuchi Satoru, Father and Son, and I

文・圖 | Lifok Oteng 黃貴潮 (貴潮文化工作室負責人)

依我日記的記載（日文版《リボク日記》及中文版《遲我十年》），我與子馬淵第一次見面在1971年3月22日星期一的宜灣部落。那時子馬淵是大學生，後來交談中知道他



馬淵東一及其夫人文字小姐。
馬淵東一氏と文字夫人。

私の日記に依ると子馬淵と最初に合ったのは1971年3月22日月曜日、宜湾部落でと記してある。その頃、子馬淵は大学生で、後で話が決めると今後からは宜湾部落を中心に阿美族伝統文化の田野調査をする計画と言う。それで隣家の姉に子馬淵が今後の仕事の為に宿泊や其他一切のお世話等相談し、すぐ承諾したので安心した。このように事情が順序に進み、子馬淵はあれからこの姉家との往来がつづき今年でもう38ヶ年となった。姉の本名はDongi、漢名は徐玉蘭今年84歳になる老婦人。そうして子馬淵の身替之母と同時兼てのインフロマンです。

子馬淵と知り合い

顧りみると子馬淵の過去38ヶ年間大学生、修士、博士課程、教授生活今迄交流が出来たのは矢張り子馬淵と徐家との不思議な縁の結びを信ずる。子馬淵の阿美族名はDiway、加した男子年令階級級名は



1978至1986年，馬淵東一寫給黃貴潮的賀年明信片。

1978年から1986年の間、馬淵東一氏がガリボク氏に宛てた年賀状。

的計畫，繼續以宜灣部落為重點，做田野調查，於是交給我的表姊，要安排他的住宿及其他照顧的事情。他一待表姊家至今已38個年頭了。她叫Dongi徐玉蘭，今年83歲，她是子馬淵之報導人之一，同時當子馬淵的乾媽媽，是位慈悲的阿美族老婦女。

遇見子馬淵

這38年來，子馬淵由大學生、碩士班、博士班、教授生活中，往來的就是宜灣部落的徐家一家人。子馬淵的阿美族名字叫Diway，男子組的組名叫Lafowak（泉水），宜灣的人沒有不認識他的。由此，宜灣是他的第二故鄉也。1977年7月31日，子馬淵的婚姻典禮也在徐家舉行。

1973年我移住台北市生活後，才開始接觸相關人類學的學說，重新向子馬淵認識。經過子馬淵指導學習，並由他提供大量的書籍刊物等，讓我閱讀吸收相關人類學等知識。可說1984年在子馬淵的推薦下，我終於可進入中央研究院民族學研究所擔任研究助理。由此為我後半生的人生舞台，肯定為名符其實的讀書人。又1995年由他編輯的書名《リボク日記》乙本出版。更提高了我身為讀書人的知名度。非常感謝子馬淵。

子馬淵目前在日本東海大學任教授。已

Lafowak（泉の意）。あれから宜灣部落は子馬淵の第二故郷をなり、1977年7月31日の結婚式は徐家内行われた。

1973年代私が台北市内に移住してから始めて人類学に関する学問に接触し、尚悟さんの指導下に多くの書物等供給され人類学の勉強に熱中した。

その努力が有って1984年代子馬淵の紹介でやっと夢の中央研究院民族学研究所に入り研究助手をなった。そのお陰さまで私の後半生は知識分子界の一人をなった。又、1995年代悟さんの編集した書名『リボク日記』が出版され私リボクを尚さら世間の人気者にした。この様に馬淵悟は私の恩人であり、永遠に感謝する次第です。

彼は今東海大学の教授で、仲良しの夫婦と同時一男一女に恵まれた立派な家庭です。

近来仕事に為二、三年に一回宜湾来訪するが、年内中時々日本から電話を通じてこの孤独老人の私リボクを慰めています。悟さん有難う！

父馬淵との出会い

1977年8月6日父馬淵の手紙の指定した元台北市中山北路の鑽石大飯店内で会面した。顧りみると、これが最初で又これが最



有一女一男的好爸爸。由於業務忙碌，近年來二、三年才來台灣看看宜灣的人。當然會看看在台東市內的獨居老人黃貴潮。還好不管怎樣，一年中可隨時打電話聯絡，很不錯的子馬淵。

與父馬淵的會晤

1977年8月6日，由父馬淵來信邀約在台北市中山北路的鑽石大飯店內會面。是第一次會面，也是最後一面。由於之前我與子馬淵來往已有6年之久，此時我和父馬淵之關係不再像是陌生人，會面時，我一坐下來立即進入很重要的話題，也就是以阿美族傳統文化為主題開始交談。交談進行中，父馬淵拿出來一冊巨書邊翻頁，邊說明如何閱讀並詳細地解釋部分的內容。這巨冊就是《台灣高砂族系統所屬の研究》。不知交談了多少時間，最後父馬淵拿著這巨書說：「リボクさん把這本書送給你，你不要客氣…哈哈…」地交給我。我只說：「謝謝爸爸…」地結束了會面儀式。

再回顧；得了這本巨書《台灣高砂族系統所屬の研究》之後，認真閱讀了，想不到發現我家鄉地區所做的調查記錄頗多，為此我高興地不得了。例如：1931年代，父馬淵當時是大学生，大約22歲。來到宜灣地區時，找到當地的部落頭目叫Diway（54歲）做



筆者於本次論壇中，與蔡中涵教授、馬淵悟教授、星歐拉姆牧師合影（由左至右）。
フォーラムにて。（左から）筆者、蔡中涵教授、馬淵悟教授、シン・オラム牧師。
（圖片提供：編輯部）

後的一面をなつかしく思います。

元より私と子馬淵との付き合いはもう6ヶ年前で、父馬淵と合った時、今更自己紹介しないで直接本話題に交談した。本話題とは阿美族伝統文化に関する内容です。

交談が進めると、父は話のかたわら手元に置いてある巨書のページをはぐり、難しい個

所の内容解釈とこの本をどう読むかを教えてくれた。この巨書とは『台湾高砂族系統所屬の研究』だった。

最後に父馬淵はこの巨書を手にして「リボクさん、この本を貴方にあげるから持って行きなさい。遠慮するな……。ハハハ…。」

「ハイお父さん、有難う！」と頂いた。これで初対面の一時は経った。

その後、この巨書を読んだら多くの大切な珍しい、不思議な記事が発見した。特に面白い発見は1931年代宜湾部落地区に調査に来た父馬淵は大学生の22歳で、そのインフロマン（口述者）は宜湾部落頭目名はDiway約54歳。この頭目は私の祖父だったので。

末筆に話をまとめると、祖父Diway（見542頁）の口述を馬淵東一が記録、整理、出版し、後で馬淵悟により再分析、研究、討



黃貴潮，阿美族名為 Lifok Oteng，台東縣成功鎮宜灣阿美族人，1932年生。有「宜灣瑰寶」之稱。



Lifok 年幼時罹患怪病，他以大量閱讀、學習奏樂及製器來度過漫長的病榻歲月。其後在姚秉彝神父的培育下，投入部落文史的採集工作。1983年經由日本學者馬淵悟引介，進入中央研究院民族學研究所擔任劉斌雄教授的得力助手；嚴謹的學術歷練讓他逐漸呈現過去累積的知識能量。1990年轉任交通部觀光局東管處專員，協助東管處完成一系列的阿美族文化出版品。Lifok 個人著作則有《Lifok 黃貴潮日記日文版》、《遲我十年》、《伊那 Ina，我的太陽——媽媽 Dongji 的傳記》。

儘管已屆高齡，Lifok 仍樂此不疲地持續創作與記錄，以沐浴在自己的文化中為樂，並為世人照亮了阿美族文化的研究與認識之路。（編輯部整理）

黃貴潮（アミ語名リボク）は台東県成功鎮宜灣出身のアミ族である。1932年生まれ。「宜灣の宝」と呼ばれている。

リボク氏は幼い頃に奇病にかかり、病床にあった長い年月を大量の読書と音楽の演奏、器具の作成をしながら過ごした。そしてその後、姚秉彝神父の指導のもとで、部落の文化歴史採集に投入するようになった。1983年、日本の研究者・馬淵悟氏を介して中央研究院民族学研究所で劉斌雄教授のアシスタントとなり活躍し、厳しい学術的訓練を通じて、過去に蓄積された彼の知識は徐々に表面に現れていった。また、1990年には交通部観光局東管処のスタッフとなり、東管処のアミ族文化関連書籍の出版に協力した。なお、リボク氏自身の著書は『リボク日記』（日本語）、『遅我十年』、『伊那 Ina、我的太陽——媽媽 Dongji 的傳記』がある。

すでに高齢のリボク氏だが、疲れることなく楽しみながら創作や記録を続けており、自分の文化を全身に浴びることを喜びとし、世人のためにアミ族文化の研究と理解への道を明るく照らしている。



報導人，想不到那位頭目正是我的祖父也。

總而言之，祖父做報導人（該書見542頁內），由父馬淵記錄整理出版問世，再由子馬淵做分析研究，之後由黃貴潮閱讀享受。最終則是由黃貴潮再認識、學習、傳承、發揚。從此黃貴潮開始專精從事民族誌（Ethnography）行業寫作。◆

論公表され、最後にリボクが読者として享樂と言うわけ。

即ち、この巨書に依りリボクは阿美传统文化を再認識し、学習し、伝承し、発揚にと発覚、リボクの終生阿美族民族誌写作に専念となった。◆